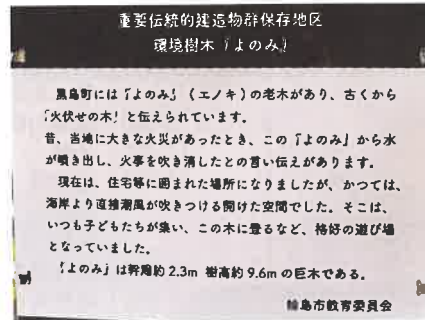


再び、黒島の「火伏せ」の老樹を訪ねる

私は、令和2年10月に黒島町（輪島市門前町）の「火伏せ」の老樹を再び、訪ねた。輪島市教育委員会が新しく標札を取り付けたとのことで訪問したのである。



新しく取り付けられた標札

この老樹は、この地に古くから「火伏せの木」と伝えられている。「よみの木」（エノキ）である。昔、黒島が大きな火事に見舞われたとき、その「よみの木」から水が大きく噴き出し、火事を吹き消したと伝えられている。

もたちが集い、その木に登るなど、恰好の遊びの場となっていた。

2016年7月に測定したデータでは、幹周は230cm、樹高は9.7mで下部の枝の太さは30cm余りある。海側の大枝はすでに欠損、頭頂部幹折れしている。しかし、老樹であるが、樹勢は衰えていない。おそらく250年は経過しているものと思われるとのことであった。



「よみの木」の全景

それは8月の天領祭りの時、汗をかきながら荒々しく町内を駆けめぐり、時には見物する人たちへの奮行も厭わない振る舞いの獅子を担ぐ若者たちが休憩する貴重な場でもあった。町内を見渡しても休憩する空地などが見当たらない黒島では、大きく手



下から見上げた「よみの木」

をを広げた「よみの木」の木陰は木陰は唯一で最適な一服の場であ

つたものと思われる。

その「よのみ」へ至る経路は、恒例になっていない表通りの佐次工門（山岸氏）宅の表（玄関）から、裏へ通り抜けて「よみの木」へまっすぐに到達できる。休憩時には、佐次工門の井戸で冷やされたスイカ、ウリなどが若者たちに供される。白足袋を履いた若者たちは冷たい贈り物に狂々と食し、木陰で横たわるのである。

今は、高齢化が進み、獅子を担ぐ若者たちの姿は見られない。昔の多くの黒島の家屋は、表から裏へ通り抜ける構造になっている。このような構造も伝統的な建造物の造りである。黒島は江戸時代に幕府の天領であり、その港には北前船が寄港し、街並みにも北前船の船主、船頭、船大工などの居住地がひろがり、大変、

栄えた町である。

最後に「よみの木」を「火伏せの木」に仕立てた古人の知恵を検証してみたい。一般的に火災を防ぐ樹木は、葉に厚みがあり、多くの水分を含む常緑広葉樹で燃えにくい樹木である、とされている。その点でエノキは、広葉樹であるが、落葉樹で冬季には葉を落とすが、樹形、分枝



春季の「よみの木」

の様式、葉の密度から耐火性について推察を試みた。春季の樹

形を見ると、途中から左右に太く枝分かれして互いに上に向かって伸びている。上部の枝も細かくよく分岐している。地表への小枝の落下もななく落ちにくいよう樹形は傘状態となる。葉質は厚く、葉は密に着生している。おそらく上方で揺れる葉群は火災時の熱風を拡散し、火勢を弱め炎の衝立となる効果が十分にあると推察した。如何でしょうか。

（県巨樹の会 高木政喜）